

ライフデザイン学部の発展に向けてー古川孝順教授の残したもの

小澤 温*

1. ライフデザイン学部の始まり

ライフデザイン学部は2005年に開学し、この3月で7年目を終え、4回目の卒業生を出すことになった。ここでは、ライフデザイン学部の設立事情と古川教授の学部設立に賭ける情熱を若干知る者としてライフデザイン学部の始まりにおける古川教授の功績とその後のライフデザイン学部の発展に関し考えることを簡単にふれたいと思う。

わたしが着任した2003年の時期に、東洋大学では、2005年3月までに白山キャンパス6号館を建設し、朝霞キャンパスで学んでいた文系学部1、2年生を白山キャンパスに移動し、2005年4月から白山キャンパスで4年間一貫の教育をする計画を進めていた。東洋大学のアピールした都心での4年間一貫教育は、その後の大規模私立大学の都心回帰の嚆矢として当時マスコミ等で大いに注目を浴びた。白山キャンパスの整備が着々と進展している一方で、朝霞キャンパスの活用をどのようにするのが法人において大きな課題となった。朝霞キャンパスは白山キャンパスに次いで交通環境のよい利点があり、キャンパスの利用に関しては、法人として大きな議論がなされた。特に、板倉キャンパス、川越キャンパスの学部の新構想などもあり、多くの案が提案されては消えて行ったと思われる。その中で、東洋大学の社会福祉学における歴史と伝統を鑑み、総合的な社会福祉学を核とした総合福祉学部構想が採用されることになったのは、法人、大学執行部とどのようなやりとりがなされたかはわからないが、古川教授の功績が大だったと推測する。

法人と大学執行部の了解はなんとか取り付けたが、この構想の実現のもっとも要になる社会福祉学科における総合福祉学部構想とその是非に関する議論はかなり激しいものがあつた。結果的には、社会福祉学科とは別の新学部を設立することで決着をつけることになったが、東洋大学の社会福祉学関係教員、学生、大学院生の力を2分してしまう危険性もあり、今考えてみても古川教授をはじめ新学部推進派の教員にとっては苦渋の選択だったと思う。

2004年1月に、朝霞キャンパス新学部準備設置準備委員会が正式に発足し、古川設置準備委員会委員長のもと、鈴木教授、大迫教授、小澤のメンバーでスタートをした。同時に、事務課においても新学部設置準備室が設置された。後に、人間環境デザイン学科設立のために、高橋教授が加わった。社会福祉学科と別の新学部の設置ということで、最初に、やらなければならないことは、学部と学科の名称とそれを裏付ける構想の検討であった。新学部は、「生活」をキーワードにすることはメンバー間の合意を得ていたが、具体的な学部名と学科の大筋の名称は古川教授の発案によるところがほとんどである。本当に、短期間に、ライフデザイン学部、生活支援学科というネーミングが提案され、その内容もほとんどできあがったことに関しては、古川教授の功績の中でもっとも大きなものである。健康スポーツ学科に関しては、最初は、健康支援、ヘルスプロモーション、健康増進といった提案が、

*筑波大学大学院・人間総合科学研究科生涯発達専攻 Tsukuba Univ. Graduate School of Comprehensive Human Sciences

準備委員のメンバーからなされたが、最終的には、高校生へのわかりやすさから健康スポーツ学科になった。この高校生へのわかりやすさという視点は重要であり、当初、一番受験生が集まりにくいのではないかとされた健康スポーツ学科はライフデザイン学部のみならず東洋大学全体においてももっとも人気のある学科になっていることは、健康スポーツ学科の先生には申し訳ないが設置準備委員会のメンバーとして本当に嬉しい誤算である。

2004年6月の文部科学省への申請に至る半年間は2日に1回程度の会議と打ち合わせ漬けであり、古川委員長をはじめ準備委員と設置準備室の事務スタッフの努力の時期だったと思う。特に、事務スタッフにはその勤務時間の長さも含めて超人的な努力の時期であり、今考えても頭が下がる思いである。この時は、保育・幼児教育の申請に関して、東洋大学としてのこれまでのノーハウが持ち合わせていなかったために、まだ、着任していなかった清水教授、角藤教授、そして、社会福祉学科の森田教授の多大な協力を得ながら進めたことが印象に残っている。2004年6月になんとか申請することはできたが、その後、ライフデザイン学と生活支援学の基盤となる科目がないという指摘事項を文部科学省から受け、その対応において、ライフデザイン学入門と生活支援学概論を科目として起し、その科目内容は古川教授が考案した。その成果は、ライフデザイン学入門、生活支援学概論、いずれも本となり古川教授により刊行された。このような取り組みにより、古川教授をはじめ多くの関係者の尽力の賜物でライフデザイン学部は2005年4月に予定通り開学することになった。

2. ライフデザイン学部の発展に向けて

既にふれたように、ライフデザイン学部のグランドデザインのほとんどの構想は古川教授によってなされたといっても過言ではない。この度の古川教授のご退職を契機に、ライフデザイン学部にとって、これまでの取り組み以上に、新たなビジョンとコンセプトをもった再出発の時期としてはほしいと思う。2004年にライフデザイン学部の構想を考えていた時期と現在では社会状況も異なり、特に、社会福祉学系の大学の学生確保の厳しさも当時と現在とでは大きな違いである。また、社会福祉士をはじめ、各種の福祉関係職種の内容が細分化され、実習・演習担当教員の条件も厳しくなったことも学部・学科運営に大きな束縛を与えていることも当時との違いである。

こうした厳しい状況は理解できるが、その一方で、ライフデザイン学部は、社会福祉学科と別の新学部としてスタートをしたので、伝統的な社会福祉学にこだわる必要がないため、社会福祉学と健康増進科学、生活環境科学といった分野の教員の宝庫である点はいへん有利と考える。ぜひ、この利点を今後の発展に生かして頂きたい。

ライフデザイン学部設置から7年間、これまで学生教育を中心に学部の運営が進んできたが、研究機関の設置を含めて、社会に本学部の研究成果を情報発信できる体制も整えることも期待したい。そのためには、大学院生の活用と支援が必要な時期になっていると思う。わたしの専門領域の障害者福祉では、社会福祉の専門スタッフと生活環境の専門スタッフが揃っているライフデザイン学部こそ、わが国で障害者のアドボカシーや人権に関するリサーチセンターの設置にふさわしい機関として考えることができる。

以上、いろいろと、個人的な思いを書いてきたが、ライフデザイン学部の卒業生が東洋大学の社会福祉学の伝統をふまえながら学際的で柔軟な思考のできる専門職としてさまざまな分野で、今後ますます活躍することを期待している。